

バルザック二十代の哲学論考

私市保彦

まえがき

『人間喜劇』の作家バルザックは、二十歳前後に多くの哲学関係の論考を残している。かつて、バルザックが哲学を論じるとたちまち面白くなくなるといった日本のバルザツシアンがいたが、一方ドイツのクルティウスは浩瀚な著書『バルザック』でバルザックの哲学的志向が作品と一体となっているさまをつぶさに論じた。¹⁾

二十代ごろのバルザックは哲学書を読み漁り、断想を手稿の形で多数残している。バルザックは断想にとどまらず、まとまった哲学論を残しなかったに違いはない。自伝的要素をとどめている『ルイ・ランベール』にはその回想が挿入されている。例の「既視（デジャ・ビュ）」の体験を語る場面のと、主人公のルイ・ランベールは、こ
う回想している。

その翌日からさっそく、彼は「意志論」というタイトルの著作にとりかかった。熟考を重ねながら、彼はしばしばその構想と手順に変更をくわえた。しかし、莊重なその日の出来事がこの著作が生まれるきっかけになったのは確かだった。⁽²⁾

自伝を盛りこんだ創作に「意志論」を書いた逸話を挿入しているのは、作者＝バルザックにとって、この論考がいかに重要なことであるかを物語っている。とはいえ、狂気に陥った主人公の遺著が書き残しているという構成のなかでは、その遺著はいかにも狂気のなかで書かれたごとくに残されているが、至る所に初期の論考のアイディアが見られる。

さて現実の青年バルザックは、二十歳ごろ必死になって独創的な著述をまとめようとしていた。この時期に、バルザックは哲学書を乱読して多くのメモを残し、そうした手稿はフランス学士院ロヴァンジュール文庫にあるロヴァンジュール・コレクションに保存されている。しかし、当該の論考が現状に復元される時点で我われが遭遇するには、現代はフランス学士館に所蔵されているバルザックのコレクションがロヴァンジュールによってシャンティイの城館に所蔵されていた時代に遡らねばならない。

かつて、そのシャンティイで日本の広島大学の長崎広治教授が当該の手稿を写真に撮って復元しようと試みていた。そのことはフランスのバルザック研究者たちの噂になっており、私が渡仏したときに長崎教授はその後どうされているか尋ねられたことがあるが、当時は長崎先生のお仕事については私には不明であった。なお、私もたびたびシャンティイを訪れ、バルザックの他の手稿を調べたことがあるが、若き研究者にとっては、現物の手稿を目にしてもなかなか手に負えるものではなかった。長崎先生のばあいは写真で撮影して仔細に調べようとしたようで

ある。当時、この作品は手稿のままA166という分類番号で四葉から九葉までの束として保存されていたからである。

当初この手稿は、ガブリエル・ヴィケール（後述のゴージェの論文によっているが、バルザック書誌に詳しい信州大学教授の鎌田隆行氏と通信したところ、この人物は作家ガブリエル・ヴィケールではなく、その従兄弟のロヴァンジュール文庫司書ジュールジュ・ヴィケールとのことのようなので、ここに註記しておく）によって、四葉と五葉が「言語の起源について」と仮題をつけられ、七葉から九葉までが「自然、人、人の機能に関する小論」として整理されていたようである。⁽³⁾ところがゴージェは手稿を仔細に検討して、それが一連の論考として書かれているとして論旨に沿って七葉、四葉、五葉、八葉、九葉の順で復元し、さらにべつの用紙による四葉の別書きを掲載した。⁽⁴⁾プレイヤード版では前者の一体化したテキストを編集し、「天才に関する詩論」として『雑作品集、一』に収めている。⁽⁵⁾編者はロラン・シヨレ（私に長崎教授の消息をたずねたバルザツシアン）とルネ・ギースである。それを邦訳したのが、以下の訳文である。なお、スペールベルヒ・ド・ロバンジュールが残したバルザックのコレクションは現代フランス学士館に保存されているが、かつてはシャンティーの宮殿に保存されていた。その意味でシャンティーはバルザック研究の聖地であり、私もしばしば訪れた。しかし、バルザックの手稿に無秩序に接したので、なんらの成果も得られなかった。

ところが、前述の長崎教授による「広島大学学術情報リポとロジー」一九六九年版所収の、「バルザック初期の哲学思想（Ⅱ）」の論文は⁽⁶⁾（Ⅰは、バルザックの*Notes sur l'immortalité de l'ame*などを扱った内容の初期哲学論研究）、バルザックの論考の再現を断念したという冒頭のくだりで始まっている。そこで長崎教授は、当該手稿を復元して邦訳するのを断念したのは、直前の一九六八年刊の*Année balzacienne*掲載のH. Gauthierの論文*La*

*Dissertation sur l'homme*にて同論考の詳細な研究と同論考のテキストの紹介をしていたのを知ったからであると語っている。⁽⁷⁾ こうして、残念ながら論考の教授の邦訳は断念されてしまった。そのかわり前述の論文では、バルザックの自筆原稿を詳細に検討した解説がなされている。

こうしたいきさつがあつて、おそらくここに掲載する同論考の邦訳ははじめてのものとなるはずである。初めに断つておくが、二十歳のバルザックによる若書きなので生硬であるのは否めない。その特徴も再現しようとしたので、訳文も生硬であることを断つておきたい。(なお、sens は「感覚」、sensation は「知覚」と訳し分けたい所であるが、バルザックはふたつを混用して頻出させているふしがあるので、sensation も「感覚」と訳さざるを得なかったことをお断りしておく)

詩的天才に関する試論⁽⁷⁾

人間の営みを一見するだけで、我われ人間への深い感嘆の念にとらえられ、人間の最後の末裔たる我われをも偉大にしてくれる。この地表はほとんど耕作しつくされ、そのわずかな資源を、この上もなく度はずれた気まぐれに使い果たすように我われの意のままに使い果たした。我われはこの地をおびただしい都市で飾りたて、そこには自然の傑作と競い合うような傑作が輝きわたっているが、これらのいずれも数々の学問と多くの人々の協力を要するものである。利害から文明と法律と戦争が生み出され、それらにはありとあらゆる学問、ありとあらゆる芸術を秘めている豪奢がある。海が目止まれれば、たちまち海を渡ってしまうのである。その抑えがたい移動の性は、障害になるどころか我が世界の新たなきづなとなっている。船舶の学問は町と商業の移動を可能にし、ほかの学問は地

球の両端を結びつけて驚愕させる。我われの貪婪な手から自然が隠している蒼穹も測定され、その灯火は数えられ、幾何学は灯火の広がりを見渡し、その法則を解明しているかに見える。

そうした驚異の事蹟に次いで、人はさらなることをした。人はその事蹟を讃え、神の如くに自らを不滅のものとした。詩人の調べがそれに響きわたった。そこに抑えがたい好奇心が加わり、自然の秘儀を読み取り、崇高の頂点に人が達するまでの絶え間ないこの努力の因もとを突き止めようとする。しかし知者に問えば、その因は天才であると答え、我らの好奇心に一言で返す。

天才とは何かを解明するために、創造の秘儀を追求するために書きつくされたように、すべての書物が書きつくされた。

たしかに人間の学問はその起源からつねに統一性を保ち、大海に注ぎこむ数多い河川といえる諸学問においても力と速度を保ってきたが、何世紀にわたって歩んできた広大無辺の道でさらに進歩をとげることであろう。しかし、学問の歴史を研究すると、その活動のあげく学問の発展にたいして激しい嫉妬が生じているのを認めざるをえないように思える。奔流のごとき啓示に対して一世紀から二世紀にわたる野蠻が横行し、いつの間にかすべてが失われ、謎につつまれ不安をかもし出すようになってしまう。一方、自らの廃墟のなかで天才は創造した数々の知識を蓄積し、学問の王宮を絶えまなく再建して、自ら努力して得た目的物を未知の聖域に浸透させねばならなくなるのだ。

そこで、人は恐らく自らの魂の真髓と天才の炎を悟ることとなり、第一原因はもはや秘義ではなくなる。今こそ天才が提示する課題を解くことが可能ではないかと思うのである。コルネイユに、ラシーヌに、聖なるホメロスに、マントゥー（イタリアのマントヴァ生まれのヴェルギリウスのこと）にその才能の謎を問わねばならない。だが彼らの墓は答えない。彼らの著作は立派な墓所であるが、我われはその秘義を探りあてぬまま慰霊碑をめくり歩いて

いる。

こうした問題をあえて私が問おうしているが、それは震えおののきながらである。だが、この問題にある明らか
な矛盾とそこに流れる文学上の異説が注目を引いた。そこで、すべての曖昧な点を避けてさかのぼって原則を打ち
立てねばならなかった。

まず、天才という言葉の説明からはじめ、ついで天才一般について考察し、さいごに天才を本質的にとらえ、自
分自身とは異質の詩的天才に導かれる天才というものを、認識しよう。

言語とは、認知した事物、感じ取ったあらゆる知覚、さまざまな事物とさまざまな知覚のあいだに発見されるあ
らゆる関係を人に描写する方法である。

言語は、糸から織物が織られるようにさまざまな語法で言葉が表現する変化によって、その難しい目的を成し遂
げる。

言語の創造は人間の精神にとつてあまりに多くの働きを求めたので、愛の言葉や宗教にまつわる言葉を発し理解
させるために幾数世紀が流れた。そのため、今や残存をとどめていない天上の言葉を生まれたばかりの原人が話す
ほうが容易だったろうと思われたほどである。

この問題については、学者たちによる方法によって一歩ずつ追求するのは無駄である。もつぱら言語の様態だけ
を追求してみようではないか。

馬とか木とか植物（木 = tree と植物 = plant と重複語を使っている）といった我われの知覚の対象となる物の
ために最初の言葉が考案されたと思うのは自然であり、これらの言葉は対象が目に見える物であるという理由から

生まれたのだ。私はそれらを単一語 (mots simples) と名づけている。ついで、大きいとか小さいとかの物同士の関係を示す形容詞にあたる言葉を人は探したであろう。これらの関係はまだ目で見えているが、はじめての言葉と同じように物としての現実性にもとづいた言葉を設けることができないうまでである。というのも、そうした関係は人間の感官に応じて変化し、ついで物理的には見通せない内的な操作を求めるからだ。そして、この操作が必要であるのは、これらの言葉がすでに見出された言葉のあとにくることを証明するからである。この第二の言葉は複合語 (mots mixtes) と呼ぶことができる。この発話法でさいごに苦心した点は三番目の種類の言葉であって、これは論争の永遠の糧^{かて}である。これらの言葉には、いかなる現実的な実体もいかなる目に見える特徴もない。これらは多少とも多くの言葉の集まりを我われに呼び起こすのだが、土台となる単一語や複合語からは非常にかけ離れた特徴があり、天才とか美德とか無限とか神などといった言葉である。

しかし、科学、美德、天才、面積、無限、精神、趣味といった言葉は抽象語であり、理解するためには多かれ少なかれ学問的な定義が求められる。天才という言葉にある観念の集まりより、木という言葉や大きいという言葉が表す観念の方が容易であると思うのは明らかである。木という実体を見ることができ、大きい木と小さな木のあいだの関係は見てとれるが、天才は目に見えず、無限を一気に思い描くことができないう。こうした言葉に含まれる観念の集まりを定義するのは真の科学である。

言葉が単一語に限られている部族がいる。こうした部族では、たったひとりの人物でも民族全体の学問と同じだけの学問の持ち主である。

少しだけの抽象語しかない他の民族もある。さいごに抽象語を豊富にもっている民族もある。ヨーロッパのほとんどの民族は無数の言葉が含まれる言語を持つてはいるが、言葉を通して人のあらゆる感覚と観念を言い表せるほ

どに豊かな言語というものはない。

以上の原則が立てられたら、天才という語のさらに詳しいさらに深い含意を追求せねばならない。それには、明確に推論できる用語によってあらゆる曖昧な意味を取り除かねばならない。人間には潜在的な能力がある。その能力(puissance)は人とともに生まれ、人とともに成長し、人とともに死んでゆく。というのも、能力は力を發揮することから始まり、それは大きくなり、成長し、減少しするさまを目にすると、能力というのはさまざまな過程をたどって人とともに消滅すると考えるのは自然であるからだ。人が目の目を見る瞬間から、物を食べる瞬間から、歩きながら体を動かす瞬間から、その能力を使うことになる。人を照らす光、人が吸いこむミルク、人がつまづく小石は、人に何らかの効果を及ぼす。その効果を私は感覚と名づける。自分でない物体によって引き起こされるこの感覚は、おそらく迅速に能力の中枢に運ばれ、広大な領域を持つて自然がなしうるものを一瞬にして見せる未知の文字で刻まれた印象をもたらず。

印象はその触れられない能力がとどまっている箇所まで伝達され、それを元に能力は判断をする。この判断を私は単一観念(idee simple)と名づける。

しかし、つぎの働きがある。ふたつの単一観念を比較してその相互関係を作り出すもうひとつの観念である。この新たな観念の基礎となるものは、もはや我われと別個の物ではなくて、我われ内部に生まれる印象である。そして、この印象を力能の変化と見なせば、この印象は我われの一部分だと見なすことができよう。なぜなら、この印象は我われが想定した文字で刻まれているからだ。そこで、この第二の観念はいわばこの力能自体の知覚であることが分かる。この種の観念の領界はさらに広大になる。というのも、単一観念の原因である知覚を我われにもたらず物は数多くあり、それらのあいだの関係もまたさらに数多いからだ。そこで二種類の感覚(sensations)が存

在することになる。単一観念をもたらす身体感覚 (sensation corporelle) と、複合観念である知的感覚 (sensation intellectuelle) である。これら二種類の感覚は等しく我われの内部を通過するが、第一のものは身体に働きかけ、それに対して第二種の感覚はもっぱら力能に、もっぱら力能のなかで働きかける。そして、人間が学問を編み出したのは、感覚と力能と観念というこれら三つのものに助けられた結果であり、自身のなかでこの三つのものを構築したように、あるいは天才学を、あるいは鈍才学をつくりあげている。

すべての人々にはこうした力能がある。この力能がほかの感覚にくらべより繊細で、より広大で、より広範である第六の感覚であるならば、我われのものでない感覚 (sensation) 同様に物質的なものである。というのも音響と楽器がふたつの分離したものであると認めるならば、感覚 (sens) と知覚 (sensation) であるから「知覚」と訳しているがむしろ「統覚」と訳すべきか？ いずれにせよ、sens と sensation の用語は十分区別されていないように見える) は、魂と観念は、ふたつの分離したものである。ともあれ、この力能はさまざまな要素を含んでおり、天才の構造とあり方はこれらの要素が完全でないことに由来している。

これらの要素とは記憶、意志 (「ルイ・ランベール」でバルザックが主人公が「意志論」なる論述を書いたときれているので編者によって加えられた項目)、想像力、判断力などさまざまな関係をつくりだす能力である。しかし、これらの五つの機能はこうした力能を定義し説明できるように、力能内にあるものとして示されたのであって、力能そのものではないことに注目しよう。これらは、力能の特性であって本質ではないのだ。こうして我われは、想像力というケーブルで地球と万有を取り囲み、人間の精神に向かって一歩ずつ巡り歩き、広大無辺の世界を我われ人間の小さな感官に収斂させるのである。

人間の身体、知覚、単一観念と複合観念、こうした内的力能とそれら五種の機能あるいは特性は相互に依存し、

そのさまざまな働きであまりに迅速に交じり合うので、多くの哲学者たちは、その論考において結果と原因を混同してきた。そのために、さまざまな異説や学派が生まれるに至った。しかし現在までのところ、いずれもわたしが定立した説を認めるに違いないと思う。わたしは、ひたすら事実に基づいて推論してきた。いかなる余人も、ここで説明された力能、検証された知覚なるもの、その結果生まれる観念、我われの精神の最終段階である複合観念なるものを否定できないであろう。わたしが好んで魂と呼ぶ内的力能の五つの働きについては、ピュロン派風の厳しい目で（ピュロンは事物は不可測であり不確定であつて知ることにはできないという懷疑論を唱えたギリシアの哲学者）、これから検討することにしよう。

こうした検討によつて、あらゆる霊魂間に存在する相違、我われにある天才、才氣、凡庸、愚鈍などの定義へと導かれよう。

自然にはあらゆる同種のカシの木や異種のカシがあり、同種の木の葉や異種の木の花があり、動物や砂粒やあらゆる物にも、帰するところ霊魂や霊魂の特性や人間の構造にも同様に類似性と多様性がある。その所以ゆえんをはるか彼方に探し求めたが、それは我われの血筋に、我われの眼前にあつた。家の戸口にあるというのに、インドにまでその宝を探し求めていたのだ。

すべての人間と自然から生まれるすべての事物が重ね合わせるほどに相互に似ていると思われるのだとすれば、そこには同じ相貌と同じ事象が見出すことができるが、そうなると自然全体が偶然の産物であるといつても当然であるということになろう。一方、異様なほどの多様性が見られる点は他の力能が存在していることを証明するところであり、数多くの現象が見られる根拠ともなろう。

じつさい、反対論者が決して見ることできぬ真実があるとすればそれはさまざまな人々の感官の大きさのちが

いである。さらに確かなことは、しかしかの風土に住んでいる人はほかの風土に住む人とはちがう影響を被つていふということであり、それぞれの風土にはその気温に適した習性で暮らす人々がいるということだ。メキシコの人には、カナダ北東部のラブラドル半島の人とはすべての点でまったく違うのだ。人々にあるこの明確な違いは国によって違いの程度が低くあがあるとはいえず、つねに見られるのだ。気候論の体系を変更しているといわれるかもしれないが、私がいうことが真実であるならば、あなたがそれに同意されるなら、それが新しかろうと古かろうとかまわらないではないか。真実ならば賛同していただきたい。誤りなら否定するがよい。しかし、これは異議を唱えるにはあまりに明々白々のことであろう。

したがって、さまざまな民族のあいだには、背丈、感官、体型のちがいが存在するのだ。だが、それぞれの国民を別個にとらえると、さらにべつの多様性が見られる。視覚、触覚、嗅覚はそれぞれの個人で様々である。それぞれの国民の国民のあいだの大きな違いに加え、それぞれの個人のあいだでも違いがあるのだ。

さて、我われの感覚は知覚を受容するために自然によって備えられた唯一の感官である。そして、我われが感受するすべての知覚はその民族を取り巻く気候に応じて、また同じ気候で暮らす個々の人間では体の構造の違いによって、それぞれに似ていたり違っていたりするものだ。

それによって、我われの観念のすべてが構造に従って似ていたり、違っていたりするものではない。単一観念ではそうかも知れない。だが複合観念ではこの方式通りにはならない。それは我われが身体感覚に支配されず、幾分知的な感覚（知覚？）により支配されているのだ。

感覚（sensation）で起こることは一瞬のあいだ継続する。その瞬間が経過すると感覚は消えて、そのうち感覚は力能の部位に移行する。あとはこの力能によってなされる判断が加わる。そして、この判断がこの観念がすべての

人間によっても異ってくる。というのも、それぞれの人間は自分なりに判断するからだ。我われが見たように、複合観念のあいだにある関係を想像して力能が作用するのはこうした単一観念に対してであって、知覚にたいしてではない。

そこで、単一観念の感受が複合観念に依存するというあり方や、力能の五つの特性が多少とも完璧であり、単一感覚が常に同質であるにしても力能においてはかなり異質になるので、複合観念同士が似通うことはほとんどない。私が記憶と名づけるものは、知覚の判断力が優れていて、すぐに再現できるように判断の記憶を忠実に保持する能力のことである。それは内的力能と同じように機能する数多の知覚の総称にはかならない。

確かに、触れた木を持続して覚えている働きは私の内的な力能に対応する知覚である。そして、この知覚は私が記憶に従って違う性質のものであって、記憶というは前述通り定めていた第二段階の知覚が複合したものである。

想像力は記憶の一種である。もし記憶が数多の観念の追憶であるとすれば、想像力は幾多の心像の追憶であり、これらの心像は想起であり、物と知覚と物自体の知覚がもたらした観念、つまり多数の知覚と観念と物を私が自ら物体と名づけるものと同じカテゴリーのもとに人間の内的力能が集めたものである。ふたつのもの間には関係が存在していて、それらの関係がさまざま心像を形成し、想像力とはそれらの想起である。塔の崩壊、大帝国の滅亡、雷が倒す樹木と、ここに三つの事件がある。革命で倒される帝国を雷が倒す樹木に比べることができれば、ここに心像ができる。記憶力は反対に単純観念しか思い出さない。記憶力は樹木、塔、雷を思い出すが、想像力は複合観念はそれらを思い出し、それらに関係づける。記憶力は単一観念と関連し、想像力は複合観念に関連している。そして、ここに人間と動物との境界がある。ついでにいえば、動物にも知覚はあって、単一観念を生み出すことができ、その結果として記憶力もある。だが、動物の感官はうまく造られていないので複合観念は形成できないのだ。動物

はそこにとどまり、先に進もうという努力すらしない。それに対して人間はそうした退嬰たいえいに倣なまうことなく、自分が欠けているか悟り、早って動物に勝るものを手に入れようとしたのだ。

解題

この論考を目にすると、人間の思想や学問が形成される根源的な働きについて、外界から刺激を受けた感覚からいかに抽象的な観念が生まれるかを解明しているのがわかる。そのために外界の事物からの感覚から言語誕生まで遡さかのぼっている。このくだりで当時のバルザックがいかに多くの思想家の著書を読み漁り、その影響を受けていたか分かる。

バルザックはヴァントーム学院時代におびただしい本を乱読して、その後パリ大学にも在学して書を漁り、多くの断片的な論考を残している。その断篇からいかに『ルイ・ランベール』による「意志論」が書かれたかを考究したのが、アンリ・エヴァンスの『ルイ・ランベール』とバルザックの哲学⁽¹⁰⁾である。その著書で、エヴァンスは青年期のバルザックのメモ書きを取り上げているが、今やプレイヤード版のバルザック『諸作品集一』には「靈魂不滅論」「祈祷論」「哲学者たちの読書メモ」などが収められている。とりわけここで訳出したアンリ・ゴージェが編集・復元した「詩的天才に関する詩論」が収められたことは意義深い。というのは、残念ながら中断された跡があるせよ、これは若きバルザックが試し書きしたスケールの大きい論考だからである。以下、バルザックの論考の軌跡を追ってみよう。

青年バルザックの意図は壮大でつぎのような文言ではじまっている。

人間の営みを一見するだけで、我われ人間への深い感嘆の念にとらえられ、人間の最後の未裔たる我われをも偉大にしてくれる。この地表はほとんど耕作しつくされ、そのわずかな資源を、この上もなく度はずれた気まぐれに使い果たすように我われの意のままに使い果たした。

こうしてバルザックは、人類の成し遂げた驚異的な地球制覇の歴史を語る。そして、自然の秘儀を読み取り、崇高の頂点に達し得たのは天才であると、バルザックは天才礼賛を歌い、その天才を解明するためにすべての書物が書きつくされたが、その考究をさまざまに、妨害する嫉妬が生まれる。しかし天才は、「創造した数々の知識を蓄積し、学問の王宮を絶えまなく再建して、自ら努力して得た目的物を未知の聖域に浸透させねばならなくなる」¹⁰、そこで我われはもはや秘儀ではなくなつた天才という課題を解かねばならぬという。しかし、コルネイユ、ラシーヌ、ホメロス、ヴィルギリウスといった過去の天才にその秘儀を問おうとしても沈黙するばかりであるという。

ここでバルザックがギリシア・ローマや古典主義時代の偉大な文人の名を挙げているのが注目される。天才解明の脳の働きを解く後段では、典拠にしているのがコンデイヤックやカバネスといった感覚論を説いた思想家であるが、ここでは天才を論じる自論のスケールを大きく見せるためであろうか、こうして古典時代の大作家の名を挙げると、ここから自己陶醉がはじまる。そして、「まず、天才という言葉の説明からはじめ、ついで天才一般について考察し、さいごに天才を本質的にとらえ、自分自身とは異質の詩的天才に導かれる天才というものを、認識しよう」と壮大な天才解明に向かう宣言をする。

ここで論点は急に言語の問題に移る。第七葉から別途なされたメモ書きされた第四葉を書き直したテキストをここに挿入し、五葉に移行するからである。ゴージェイエの復元テキストでは、用紙が違う別書きのものとしてこの第

四葉のみを切り離して最後に紹介しているが、プレイヤード版では本論に四葉を取り込んである。そのさまを紹介するのは煩雑なのでここでは省略する（なお、ゴージェイエの復元テキストでは、四葉、五葉と手稿の番号を入れてある）。いずれにせよゴージェイエは、手稿の束は「錯綜（アンブレガリア）（imbrogliano burorio）」そのものだった」と嘆いているように、こうした復元は困難をきわめたにちがいない。

さて、「単一語」と「複合語」を分けてはじまる四葉の言語論のくだりはきわめて興味深く、バルザックはまずこの問題の解明をして先に論を進めている。

馬とか木とか植物（木＝arbreと植物＝planteと重複語を使っている）といった我われの知覚の対象となる物のために最初の言葉が考案されたと思うのは自然であり、これらの言葉は対象が目に見える物であるという理由から生まれたのだ。私はそれらを単一語（mots simples）と名づけている。ついで、大きいとか小さいとかの物同士の関係を示す形容詞にあたる言葉を人は探したのである。これらの関係はまだ目で見えているが、はじめの言葉と同じように物としての現実性にもとづいた言葉を設けることができないうままである。というのも、そうした関係は人間の感官に応じて変化し、ついで物理的には見通せない内的な操作を求めるからだ。そして、この操作が必要であるのは、これらの言葉がすでに見出された言葉のあとにくることを証明するからである。この第二の言葉は複合言語（mots mixtes）と呼ぶことができる。この発話法でさいごに苦心した点は三番目の種類の言葉であって、これは論争の永遠の糧である。⁽¹²⁾

ゴージェイエは、バルザックが他の思想家の影響を受け、それを自論に取りこんでいるさまをつぶさに分析してい

る。例えば「哲学ノート」で、バルザックが「魂には、感覚に作用する観念と、それ自身の基礎から引き出す観念」という形を取るものという二種類の観念がある」というデカルトの言葉をメモ書きしていることなどから、ゴッティエはバルザックがマールブランシュ、デカルト、ロック、スピノーザの順で読んで、参考にしたにちがいないと推論している⁽¹³⁾。

とりわけカバニスからの影響が顕著であるところから、ゴッティエはそれを強調している。カバニスは『人間と肉体の関係 (Rapport du physique et du moral de l'homme)』⁽¹⁴⁾などによって感覚の働きを生理学の次元で解明し、生理学的心理学の基礎を築いた哲学者・医学者である。バルザックの論考は、外界が感覚器官を通して受容され、それから観念が形成されるという点でカバニスのシエーマを踏襲している。しかしゴッティエによると、カバニスは観念を形成するのは外界の感覚のみではなく、内的な感覚からも形成されると説く点ではコンデイヤックとちがうのだとしている⁽¹⁵⁾。この考え方も、後述するように内的能力が観念形成にかかわると考える点でバルザックに引き継がれているようだ。

さらに、風土に人の構造や皮膚の色などが影響されるといった風土の影響論もカバニスからもバルザックは受け継いでいる。

気候の影響説はヒポクラテス、モンテスキューも唱えていたが、その後文学論にも影響を及ぼし、北方文学と南方文学の特性を唱えたスタール夫人から始まり⁽¹⁶⁾、その系譜は児童文学論においても比較文学者ポール・アザールの『本、子ども、おとな』での北方の児童文学と南方の児童文学といった比較論にひきつがれている⁽¹⁷⁾。バルザックも、ここで自説として大きく主張している。

しかじかの風土に住んでいる人はほかの風土に住む人とはちがう影響を被っているということであり、それぞれの風土にはその気温に適した習性で暮らす人々がいるということだ。メキシコの人、カナダ北東部のラブラドル半島の人とはすべての点でまったく違うのだ。人々にあるこの明確な違いは国によって違いの程度が低ければいいあるとはいえず、つねに見られるのだ。気候論の体系を一新しているといわれるかもしれない。私がいうことが真実であるならば、あなたがそれに同意されるなら、それが新しかろうと古かろうとかまわらないではないか。真実ならば賛同していただきたい。誤りなら否定するがよい。しかし、これは異議を唱えるにはあまりに明々白々のことであろう。⁽¹⁵⁾

バルザックはさらに、外界から器官が受ける感覚から形成される観念を単一観念と複合観念に分け、天才という高度の観念に辿りつくために肝要なプロセスを仮定する。そのプロセスにPUISSANCEが関わりとバルザックは説く。この用語にどういふ訳語を当てるべきか腐心した。在り来たりの「潜在力」ではその微妙で重要な作用の力が伝わらない恐れがある。そこで長崎広次は、前掲の論文中で「力動」という訳語を編み出したと記している。⁽¹⁶⁾ 私は考えたあげく「力能」とした。とにかく、目には見えないが根源的な働きをするというもので、「潜在力」という一般的な語を避けたのである。

バルザックは、前述のようにさらに単一観念から複合観念が生まれる過程も説明している。そして、いよいよ人間は抽象的な言葉と観念を生み出したのだと説いて、バルザックは天才という言葉にたどりつく。その目的地もバルザックにとって肝要であるが、我われが注目したいのは、脳内で起こるこの過程をバルザックが想定していることである。⁽¹⁷⁾

東辰之助は、『バルザック「脳」と「知能」の小説家』において、バルザックがいかに人の脳について関心を持っていたかつぶさに考究し、バルザックが当代の脳研究に関心を示し、「魂の不死に関する論考」(Discours sur l'immortalité de l'âme) などにおける脳に関する次のような極めて生理学的なコメントを紹介している。

その上、脳にはあらゆる繊維の末端があつて、それらの繊維に接続するあらゆる血管、リンパ管、などは、身体に空気と動力を送り込んでいる。しかも、血液全体を常に新しくする活力に恵まれた心臓には、栄養分が新たな精気を絶え間なく運び、心臓が形成する一種のポイラーから連続的に立ち上がる蒸気を供給している。このポイラーから立ち上がる出る煙が脳の湖を動かすのだ。このことは、生命がなぜ脳と心臓に核も起因するのかを説明するように思われる。加えてさらに、両端が神経叢となっている五感の繊維があつて、これらは常に湖に感覚を伝達するのに忙しい。伝えられた感覚は湖に、子どもが小石によつて表面をかすめるかのような効果を及ぼすのである。(東辰之助訳)²¹

ロバンジュール・コレクシオンで当該論考の手稿とは別の束に入っているとはいえ、この初期哲学論考はおそらくほぼ同時期の手稿と思われる。それにしても、「天才論」より実に生理学的な次元の説明をしている。ということは、バルザックは感覚からの受容から抽象的な観念の形成のプロセスについて、かなり脳内の具体的なイメージを描いていたことがわかる。そのイメージでもって、当該論考がまとめられたのであろう。例えば「力能(puissance)」に対応するイメージは、前述引用の心臓からの「ポイラーから立ち上がる出る煙が脳の湖を動かすのだ」という記述と関係がありそうである。バルザックは思想家ばかりか当代萌芽状態にあった生理学の知識も取りこんでいたの

である。

こうして、若きバルザックは同時に脳の機能について五感からいかに抽象的観念を形成するか、先行する思想家たちや初期の生理学的な知見の参考にして仮説を立てようとした。だが残念ながら、完全な形を成したとは到底いえない結果に終わったといえよう。

しかしバルザックは、この論考と同時にこれを契機に、小説の形で自説を展開しようとしていた。その結果生まれたのが、初期小説「ステニー、あるいは哲学的誤謬」と「ファルチュルヌ」である。ゴージェイも具体的にその相関について指摘している。⁽²²⁾じつは私の学士論文も「ステニー研究」であった。しかし、それについて詳述することはこの紙面では無理なので別途論じることにした。

ただ強調しておきたいのは、ここですでに哲学と小説のあいだをバルザックがまっしぐらに歩み始めたということである。バルザックは当時家を出て、レディギエールの屋根裏部屋でひとり暮らしをしながら古典劇「クロンウエル」を書き上げると、家人がコレージ・ド・フランスの教授に鑑定を依頼し、その結果「作家以外のものになるのならよい」というたぐいの酷評を受けたのは有名な逸話である。それにもめげず、いつとき生活のため当時流行のゴシック小説風の大衆小説をしきりに書きまくったあげく、やがて野心と嫉妬の燃える物語を、成功の榮譽と挫折の地獄を、現世の悲喜劇を描き始めたのである。その意味では、バルザックが自分の壮大な連作をダンテの『神曲 (Comédie Divine)』にちなんで『人間喜劇 (Comédie Humaine)』と名付けたのは絶妙であった。そこには。ダンテからの余韻で現世のみならず超越的世界もふくまれているからである。こうして青年期に培った哲学から、超越的な世界から、魔術的世界から、バルザックは一生遠ざかることはなかった。

青年バルザックは、神とか無限とか天才とかの抽象的な観念世界も、イマジネーションも脳内で起こる具体的な

過程としてとらえ、それによって人は壮大な世界を想像できると信じていたのである。こうした成熟した「天才」バルザックの未来像を、青年バルザックの未熟な論考は予言していないだろうか。

感覚 (sensation) で起ることは一瞬のあいだ継続する。その瞬間が経過すると感覚は消えて、そのうち感覚は力能の部位に移行する。あとはこの力能によってなされる判断が加わる。そして、この判断この観念がすべての人間によっても異ってくる。というのも、それぞれの人間は自分なりに判断するからだ。我われが見たように、複合観念のあいだにある関係を想像して力能が作用するのはこうした単一観念に対してであって、知覚にたいしてではない。

そこで、単一観念の感受が複合観念に依存するというあり方や、力能の五つの特性が多少とも完璧であり、単一感覚が常に同質であるにしても力能においてはかなり異質になるので、複合観念同士が似通うことはほとんどない。私が記憶と名づけるものは、知覚の判断力が優れていて、すぐに再現できるように判断の記憶を忠実に保持する能力のことである。それは内的力能と同じように機能する数多の知覚の総称にほかならない。

確かに、触れた木を持続して覚えている働きは私の内的な力能に対応する知覚である。そして、この知覚は私が記憶に従って違う性質のものであって、記憶というは前述通り定めていた第二段階の知覚が複合したものである。

想像力は記憶の一種である。もし記憶が数多の観念の追憶であるとすれば、想像力は幾多の心像の追憶であり、これらの心像は想起であり、物と知覚と物自体の知覚がもたらした観念、つまり多数の知覚と観念と物を私が自ら物体と名づけるものと同じカテゴリーのもとに人間の内的力能が集めたものである。ふたつのものの間には関係が存在していて、それらの関係がさまざまな心像を形成し、想像力とはそれらの想起である。塔の崩壊、大帝国

の滅亡、雷が倒す樹木。ここに三つの事件がある。革命で倒される帝国を雷が倒す樹木に比べれば、ここに心像ができる。記憶力は反対に単一観念しか思い出さない。記憶力は樹木、塔、雷を思い出したが、想像力は複合観念はそれらを思い出し、それらを関係づける。記憶力は単一観念と関連し、想像力は複合観念に関連している。そして、ここに人間と動物との境界がある。ついでにいえば、動物にも知覚はあつて、単一観念を生み出すことができ、その結果として記憶力もある。だが、動物の感官はうまく造られていないので複合観念を形成できないのだ。⁽²³⁾

こうした仮説でもって、天才という言葉の意味にバルザックは到達しようとしていた。しかし若きバルザックには、先人を超えて天才とか無限とか神とかの言葉が生まれる過程を説得力をもって構築する力はなかった。それには、現在の感覚・認知心理学などの発達を待つほかないであろう。とはいえ、その思いは『人間喜劇』の至るところに散りばめられているといえよう。その意味で、この不完全な論考には後年の『人間喜劇』の大作が生まれる萌芽が垣間見られるであろう。近年、ロビン・ダンバー『宗教の起源』（白揚社）、竹沢尚一郎『ホモ・サピエンスの宗教史』（中公選書）など、進化生物学や進化人類学などの分野での大著が刊行され、脳の進化と宗教心の発生との関係が詳述されるようになった。それらを読むにつけ、若きバルザックの着眼点の先駆性には驚かされてならない。

【注】

- (1) Curtius, *Balzac* 1923.
邦訳 小竹す澄栄訳『バルザック論』、みすず書房、1990年
- (2) Balzac, *Lous Lambert*, p.623. *Ed. Pleiade* 1980.
- (3) Henri Gauthier, *La Dissertation sur l'homme*, L'Année balzacienne 1968, p. 61.

- (4) Ibid. pp.102-103.
- (5) Balzac, *Essai sur le génie poétique*, (*Œuvres diverses*, p.591-600.
- (6) 長崎広次, 'Balzac 初期の哲学思想 (Ⅱ)'、「フランス文学」一九六九年、六十八―八〇頁
前掲書、七十頁
- (7) 前掲書、七十頁
- (8) Balzac, op. cit. pp.593-600.
- (9) Henri Eyvans, *Louis Lambert et la philosophie de Balzac*, José Corti, 1931.
- (10) Balzac, op. cit. 593.
- (11) Henri Gauthier, op.cit. p.61.
- (12) Balzac, op. cit.p. 595.
- (13) Henri Gauthier, op.cit. p.79.
- (14) P.J. Cabanis, *Rapport du physique et du moral de l'homme*, 1799-1802. reproduction fidèle de t'une œuvre publiée.
- (15) Henri Gauthier, op.cit. p.71
- (16) Me de Staël, *De l'Allemagne* . 1932年
- (17) Paul Hazard, *Les Livres, les enfants et les hommes*, Saint-Dizier:Paris, 1932
邦訳、矢崎源九郎、横山正矢訳『本・子と父・大人』紀伊國屋書店、19
- (18) Balzac, op.cit.p. 598.
- (19) 長崎広次, '前掲書' 七十二頁
- (20) Balzac, op. cit. p. 595.
- (21) 東辰之助, 『バルザック、脳と知能の小説家』、水声社、二〇〇九年
- (22) Henri Gauthier, op.cit. pp.75-79.
- (23) Balzac, op.cit. p.599